

浄土

1990-4

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（著作権者 特別授受記録誌） 第三二五号
平成二年三月二十五日印刷 平成二年四月一日発行
第五十六卷

四月号



小林





四月の秀句

象の綱伸びてすすめり花祭

象の鼻少し不出来や花祭

行列の巨象は白し花まつり

村尾 公羽

相原 雨稲

西田 穂村

四月号

作品



釈尊説き給える經、則ち觀無量壽
等の三部經なり。かの經はただ念
仏門なり。——『念仏大意』

目次

——花まつり法話——

人間らしい生き方を……………佐藤晴輝……(2)

◇特別寄稿◇

源智上人と角張入道覚書(上)

……………石畠俊徳……(11)
——百万遍余話——

＜いのちを考える①＞

思いがけぬ朝

……………佐藤雅彦……(21)
——植物人間を看取る——

《四行詩》

清明……………清川宗治……(28)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <37>

海と山の狭間で

……………木下隆一……(29)
——我が思い出に住む犬たち(23)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(16)

……………松浦行真……(37)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

人間らしい生き方を



佐^さ藤^{とう}晴^{せい}輝^き

(木更津市正行寺住職)

○お釈迦様のお誕生

およそ今から二千五百年ほど前のお話しで

す。インドの地、ヒマラヤのふもとに、カピラという王国がありました。王さまの名をスッドダーナ、お妃さまとマヤーと言いました。お二人は、王子の誕生を待ち望んでおら

れました。

ある夜、マール王妃は夢をごらんになりました。白い象が空から舞い降りてきて、すーっと体の中に入ってきたのです。とても不思議な夢でした。その夢のことを有名な占い師に尋ねると、高貴な方がお生まれになるしるしと言うことです。スッドダーナ王もマール妃も大変お喜びになりました。

子供の誕生が近づいてきたマールさまはお里へ帰られることになりました。その途中花咲きにおうルンビニーの花園に立ち寄られました。そこに咲く、真っ白なアソカの花、その花びらに手を触れられた時です。王子となる男の子が誕生したのです。

四月八日のことでした。

男の子は、生まれるとすぐに七歩、歩きま

した。そして右手で天を、左手で地を指さし「この世に誕生したひとりひとりが、みんな大切なのだ」と高らかに第一声を上げられました。花は咲き乱れ、空からは甘くてきれいな雨が降り注いできました。

シッダルタと名付けられた男の子は、考え深い、とてもやさしい気持ちを持った青年に成長しました。このシッダルタ王子こそが、のちに私たちが幸せに生きる道をお教え下さったあの「お釈迦さま」なのです。

○灌仏会と花まつり

お釈迦さまの誕生を祝う行事を「灌仏会」とか「仏生会」、「降誕会」といいますが、現在では「花まつり」という表現で親しまれて

います。

この「花まつり」、日本では推古天皇の十四年（六〇六）に行われたのが最初で、その後盛んになり、承和七年（八四〇）清涼殿で行われてから宮中の恒例行事となったようです。また各宗の寺々でつとめられたことは無論のこと、室町鎌倉時代には幕府も行ない、江戸時代には、江戸城の大奥でも行われていたと記録に残っています。

今もなお四月八日になるとお寺の本堂の前には花見堂がまつられ、花で飾られたお堂の中には小さな誕生仏が祀られます。その仏像を拝むと、右手で天を左手で地を指さしています、

「天上天下唯我独尊」

（天にも地にもただ我ひとりとうとし）

と言われたという教えが伝えられているわけ
です。

もちろん生まれたばかりの赤ん坊が、歩いたり、話したりできるわけがないのですが、後世の人がお釈迦さまの御一生のお徳を讀えんがために、

「六道という迷いの世界を越えて悟りの境地に歩まれた姿を表現したもので、ほとけのいのちは、天上から地底までつらぬいて尊い存在である」

ことを教えているのです。そして「唯我独尊」とは、「世の中でおれが第一人者だ」というのではなく、ひとりひとりの心の奥底に、生まれながらに純粋な人間性（ほとけのいのちと

こころが恵まれて、生かされていることをいうのであります。

「光明」

自分の中には

自分の知らない自分がある

みんなの中には

みんなの知らないみんながある

みんなえらい

みんな貴い

みんなみんな

天の秘蔵っ子

——安積得也詩集『一人のために』

○枯れ木に花を

土曜日の夕方ともなると、わが家では子供も大人もテレビ「日本むかしばなし」にくぎづけです。

「坊や良い子だねんねしな……」

いいないいな人間っていいな」

この歌が流れると大変な騒ぎになります。

「はなさかじい」（日本民話）

うらの細でボチがなく

正直じいさん掘ったれば

大判小判がザクザクザクザク

この小学唱歌で知られる「はなさかじい」は「桃太郎」「一寸法師」「さるかに合戦」

と並んで、日本の代表的民話の一つです。

昔ながらに語りつがれてきた民話は、時代や地域によってさまざまなバリエーションがありますが、「はなさかじい」は、こんなふうに語りはじめます。

——むかしあるところに、じいさまとばあさまがおった。としをとつても、こどもがおらんかったので、あるとき、まちへこどもをもらいに出かけることになった。そしてその途中、白いかわいい小犬に出会い、こどもをもらいそこねた帰り道に、こどものかわりに犬をつれて帰ります。犬は、おわんに一ぱいくわせれば一ぱいだけ大きくなり、二はいくわせれば二はいだけ大きくなりますが、ある日自分にくらをつけてくれとじいさまにたのみ

かますや。くわをもったじいさまを背なかにのせて、山道をのぼっていきます。そして犬がここを掘れというところを掘ってみると、大判や小判がいっぱい出てきて、じいさまはたちまち金持ちになりました。

さて、それを聞いた隣のじいさまとばあさまは、白い犬を借りて、さっそくおなじことをやってみますが、出てきたのはヘビやムカデやカエルばかり、おこったじいさまは、犬を殺してしまいます。犬を貸した方のじいさまとばあさまが、犬の死体を畑の片すみにうずめ、その上に一本の松の木をうえると、木はすくすくとのびて、大きな松の木に成長しました。

ある日じいさまがこの松の木に水をやっていると、きれいな鳥がやってきて、この木で

うすを作れとうたうので、うすを作ったところ、米をつくたびにたからものとびだします。これを聞いた隣のじいさまが、またそのうすを借りると、出てくるのは牛のくそや馬のくそ、おこつてうすを燃やしてしまいますが、貸した方のじいさまが、その灰をまくとふしぎなことに枯れ葉が芽を出し、つぼみがふくらんで、花が咲きます。じいさまは、日本一の「はいまきじい」として殿さまにほろびをもらいますが、またまたそれをまねた隣のじいさまは、花どころか、灰が目にはいって、目がみえなくなつてしまいました。

最初の唱歌にもあるように、この民話は、「正直じいさん」と「欲深いじいさん」の物語で、犬の報恩という捉え方ができますが、

観点を変えてみると、

「枯れた木に花を咲かせる」

という真実の生命に目覚め、その生命を活かしていこうとする教えがあるように思うのです。

花咲かじいさんが灰をまいて枯れ木に花を咲かせたように、お釈迦さまは、生きていく自信をなくした人々の心に、仏の教えの灰をまいて心に花を咲かせたのです。

私たち一人一人もまた、天地の中でかけがえのない、たった一人の尊い存在である事実を確認しようではありませんか。

二つのパンがあるならば

一つを売って花を買え

パンは体を養うが

花は心を養うから

——西洋のことわざ

○梅干しの歌

ひと昔前までは、親の説教に我慢できなくなつた子供が、

「誰が生んでくれと言つたよ」

と口答えると、

「こんな子供に育てた覚えはない」

と嘆く母親が多かつたが、最近では、そんな親子の会話が減多になく

「めし」・「かね」・「うるせえ」

ぐらいしか聞くことがないとききます。

親と子の絆はお腹の中にいた時から、母親の子供に与える影響については「胎教」が注目されて久しいわけですが、人間の生命に対する尊厳がなければ、所詮「おしつけ」に過ぎないと思うのです。

つまり無教の生物がいる中で人間として生まれたのは、ご先祖さまが人間だったからですが、この人として生をうけた有難さがわからないと、ほんとうの喜びはわいてこないものです。自分の都合ではどうにもならない、生かされている生命を、あたりまえだと受取らずに、あること難しと受取るところに本当の人間生活（人生）の歩みが見い出されることでしょう。

医療技術の進歩により、人間は病気を克服しつつ、今までには考えられない程の長寿を

保てるようになりました。

たとえ百年生きて

生起と消滅を見ないよりも

一日生きても

起と滅とを見る方がよい

——『法句經』

とお釈迦さまが教えているように、長生きが必ずしも幸福には結びつかないのです。人それぞれ、与えられた寿命の中で、生命を大切に生きていきたいものです。そしてこの世に人として生まれた以上は、人間らしい生き方をしたいと願うことが生きがいに通じるのではないでしょうか。

「梅干しの歌」

二月三月花ざかり、驚ないた春の日の、楽しい時も夢の中、五月六月実がなれば、枝からふるい落されて、近所の町へ持ち出され何升何合のはかり売り、もとよりすっぱいこの「からだ」塩につかって辛くなり、しそに染って赤くなり、七月八月あつい頃三日三晩の「土用干し」、思えばつらいことばかり、それも世の為人の為、しわはよっても若い気で、小さな子供の仲間入り、運動会に持ってゆき、海や山にもお供するなくてはならぬこの私
なくてはならぬこの私

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の實踐をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



《特別寄稿》

源智上人と角張入道覚書 (上)

— 百万遍余話 —



(一) はじめに

春秋のお彼岸の中に日の没する方角を、「西方のお浄土の東門の中心にあたる」と教えられて居ります。浪華では四天王寺の西門、京落では洛東の清水寺の舞台。近江では、大

石 いし
晶 はた
俊 しゅん
徳 とく

(大津市浄光寺住職)

平山の中腹より瀬田（勢多）川を距てて、太陽の西山に没するのを観想するには当山こそ、最適の処との思いから、その日想観処に「南無阿弥陀仏」の六字の名号石の建立。そのためには有縁の高徳の方の御染筆をと、念願しておりました折柄、不思議な御縁で、「法然上人五十一歳正御筆、源智上人より、成阿房へ授与」との裏書のある、御名号巻軸を入手いたし感激。早速有志の方の浄財と、石材店主の奉仕で、宿願を成就致しました。

その裏書の中に出てまいります「成阿房」の事蹟に就きましては、『法然上人行状絵図』（勅修御伝）第三十四に、

三月十六日（建永二年、一二〇七年）、花洛をいでて夷境におもむき給うに、信濃国の御家人角張の成阿弥陀仏、力者の棟梁として最後の御ともなりとて御興おんこしををかく。

とあるのを拝読いたしましたして、角張の二字に珍らしい名もあるものだ。姓氏なのか地名なのかと、いささか好奇の心を持つ程度でしたが、此の度前記のような御縁に遇いましてからは、今少しく詳しく承知したいものと、手の届く限りの御縁を求め、大方の示教を仰ぎました結果、拝受の数々の覚書を左にまとめてみました。

（二）法然上人諸伝中の成阿房の事

④ 先づ『浄土宗大辞典』第一巻か之部に――

かくばりにゆうどう「角張入道」

十三世紀初頭の人。生没不明。成阿弥陀仏。信濃（長野県）の人という。

一説には、清和源氏六孫王（経基王）の苗裔で、信州高井郡井上村犬栗の俗名七郎太または荒次郎であるともいう。

法然上人流罪の時、力者の棟梁となって興をかついだ。

また『源平盛衰記』に甘糟太郎忠綱戦死の報が、法然上人のもとに届いた時敬仏房と、かくはり（角張）の浄阿弥陀仏が同席していたことが記されている。

〔参考〕『九卷伝』六上、『十卷伝』八、『勅伝』三十四、『翼賛遺事』。

辞典に高井郡井上村大字犬栗と教示下さってありましたので、早速『浄土宗寺院名鑑』を抜き、長野教区の中に高井郡井上村を求めましたが見当らず、尚断念せず、ともかく宗内の事だから郡区内位は御交誼もあろうかと、上高井郡小布施町龍雲寺様宛に、突然、しかも書中での失礼を詫びながら、貴郡内に角張成阿入道ゆかりのお寺を御存知ならば、御紹介下さいと、願い出ました処、折かえし早速懇書を拝受。「井上村は町村合併で須坂市に編入されましたので、名鑑では解りかねます」とて、須坂市井上町浄運寺様を御紹介して下さいました。

不日、浄運寺様より、「角張上人についてお尋ねとの事、龍雲寺様からお手紙を回送し

ていただきました。当山は角張上人開基と伝える寺で旧井上村は現在須坂市井上町に住所表示が変わっております。犬栗は土栗の誤りで、寺の東方数百メートルにある字名です。

角張上人は残念ながら、拙寺および出身地井上町には、ほとんど史料がございません。角張姓は一軒あるのですが、血縁的には別です。おそらく角張一族が川中島合戦後、上杉軍勢に随って越後へ移った（敗走）ためと考えられます。（中略）ご参考までに手元にある角張上人等に関する資料をお送りします」とあり、尚「何れにしても、角張上人開基寺の住職として、上人の顕彰につとめてまいりたいと念じております」との有難いおたよりでした。

そして、淨運寺報『松柏』（井上系角張氏の家紋に因む）第二十四号、特に「開基角張上人像完成、開山堂に安置」の記念号で、角張上人御木像（新彫刻）のお写真の奉掲号を頂き、他に角張毅という方の『角張氏の今昔』と『角張成阿弥陀仏研究』その三——北信の三ヶ寺について——も同封して送って頂きました。

後ほど、縷々紹介させて頂きます。

別に称念上人に關しましては、同じ須坂市福島の西福寺様より、寺報『光明』二部と「開基は石垣の金光上人で、称念上人（後洛東一心院開山）は中興開山上人です」と御教示下さいました。

〔註〕角張、角取等の地名・山名・姓氏由来

1 角取、角折、角吹山、角落山

角取（新潟県柿崎町字角取、静岡県小山町角取山）同じく土地の伝承では、鹿の角が折れる程、強風の吹く場所、となっている。他も同様の意味と思われる。

2 角張、角田、鹿又

鹿が繁殖のため集まる場所に思われる。

3 角間、鹿沢、鹿角、鹿教湯温泉

鹿が傷をいやしに集まる温泉などの土地。

4 角張姓の由来

角張は現在の呼び名であるが、法然上人伝やその他の古典には「ハカクハリ」「ハツノハリ」或は「ハツレオリ」など呼び名は様々である。これについて『勅修法然上人御伝全講』〈著者早田哲雄、昭和四十二〜四十七年刊〉によれば「今の福井県敦賀郡の古名は角の国」と言い、また福井県足羽郡に角折村があつて、略して「ハツノリ」と呼ぶから「ハツノハリ」「ハツヌハリ」と呼ぶのが正しい」と。このことから推測して角張の角は本来「ハツノ」と読むのが正しいように思われる。そしてその角は鹿の角から来ているらしい。古来鹿は人間生活と深いかかわりがあり、角の付いた地名も数多い。

5 成阿か浄阿か

最近、滋賀県信楽町勅旨真言宗玉桂寺にて発見され解体修補された、勢観房源智上人の発願造立（快慶作）にかかる阿弥陀仏像の胎内から出た、奉願文、数万人の結縁交名帖の中に、特に行を改めて、その第一筆に記されているのは「成阿弥陀仏」となっている。

然るに嵯峨二尊院所蔵の「法然上人七ヶ條制誡」の中第百十一番目の署名は「浄阿弥陀仏」と記されている。何れが正しいのであろうか。本来は浄阿（自署）なのだが、他の人が普通で成阿と書いたのでは。

⑩ 隆寛本『法然上人伝』には――

京都の大本山清浄華院内の十二光院において、成阿房が強烈な念仏の毎日を送っていた事。更に法然上人の遺訓である「一枚起請文」を相承した弟子の中に成阿も含まれていた事。

〔註〕「一枚起請文」の相承とは、遠隔の法兄達に源智上人が浄写して贈られた事であろうか。

◎『極楽から来た』(佐藤春夫作)には――

承元元年(一二〇七)三月十六日、いつも早起きの法然上人は、前夜来招かれて泊っていた九條兼実公の法性寺第、小御堂の未明に目ざめられた。今日がいよいよ流刑の日で、特に早朝人々の目につかないうちに、都門から出るようにというその筋の達しがあったからである。

法然上人は、最初の師観覚得業の教へを固く守って、平素は輿や車に乗ることはなく、いつも金剛草履で歩いていられたが、この日は上人の高齢と前途の長い旅路とを案じた兼実公の計らいで、特に輿の用意がなされてあったのを法然上人も拒まれなかった。

別れを惜しむ兼実公に対しても、ただ一語を残して庭に下り立ち、さすがに後ろ髪ひかれる思いはあられるらしく、合掌して伏し拝み見送っていた兼実公を、一度ふりかえって見たまま、用意してあった中庭の粗末な輦輿(かみこし)のなかへ、そのたくましく肩幅の広い後ろ姿を無雑作に消された。

輿には自らその任務を買って出た門弟、角張(かくばう)の入道成阿弥陀仏が力を従えて、これを率領しつつ、輿はしづかに法性寺の門を出ると、造り道を鳥羽の草津に向った。あとには師の上人を護衛するかのように門弟が六十人ばかりつき添い従っている。

未明の都門を朝霞にまぎらせて追放しようという企てにもかかわらず、上人遠流の日を

聞き知った道俗の老若男女が輿を迎えて上人を見送る人垣が、造り道の左右に群れていった。そのけはいに気づかれた法然上人は自身で輿の帳をはね上げて、にこやかな顔を群衆に向け、「道すがら行く先々の人々を勸化するのをたのしみに出で立ちますぞ」と会釈なさると、人垣のなかからは異口同音のお念仏が松籟のように起って、なかには涙にむせぶ人もまじっていた。

——佐藤春夫はこのように綴っています。

① 『御傳翼賛遺事』一巻、見阿著——

(大正大学図書目録——一五一六—四七) 享保十四年(一七二九) 刊

高井郡井上村の内土栗村(信濃国角張成阿旧住地。洪水のために住民は移動し、見阿が現地調査に赴いた頃は、角張成阿系の子孫で残留するものは稀であった。大辞典の大栗は誤植で、土栗が正しい)に角張の善兵衛と号す人で、成阿の末孫が見阿が訪問した当時残留して居り、彼の人見阿に語っていていわく、「成阿の俗名は七郎太郎又は荒次郎と申し……」と(七郎政氏の長男で七郎太郎、次男は碗白であったので次郎が本名で、世人呼んで荒次郎と言うたものと考えるのが合理的であろう)。

又或る老父が見阿に語る処によれば「角張は処の名(庄の土地の名)にて、昔は城などあ

りて角張城主と聞いて居ます。越後と信濃の国つづきにて柏崎に近き所なり」と言えり
 (大辞典の典拠はこれか)。

⑩ 『法然上人遠流記』 “父の蛇の事” ——

父七郎政氏が生前中の所業の酬いにより四国の岩の水たまりの蛇となって五十余年成仏出来ないと云う物で、成阿が法然上人の四国御流罪の警護の心入れて、随伴、給仕申上げて居た時に、たまたま兄七郎太郎が信濃より京都に来て居ると聞き、法然上人のお招きで四国の小松の庄に呼んで、成阿の父七郎政氏の因縁、事情を聞かれた。成阿は幼稚五才の時に父政氏は早く死なれたので是非の事情は知らない。今始めて見れば父は小蛇の姿となっている。是れは何の酬いで五十余年の間、四国の彼の岩の中に在られたことは悲しいと、涙を流す。

そこで来訪した長兄の七郎太郎が法然上人の前にて申上るには、「父政氏の押領使として司どる領内に旧寺一字候いしに、免田三町歩、寺の祠堂田として寄進されていたのを没収し、取り上げて、部下の給与として分配させられたと承っております」と。

(つづく)

好評

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、讚重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る 念仏の法門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳 念仏の要諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人 勅修御伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳浄土三部経

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人 選択集

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師 観経四帖疏

B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師 六時礼讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）

編訳 村瀬 秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番

△いのちを考える①▽

思いがけぬ朝

— 植物人間を看取る —

佐^さ藤^{とう}雅^{まさ}彦^{ひこ}



「おばさん、それじゃまたあした」
眠ったままの病人に、そういつては、
部屋を出る生活が五百日間続いた。

「植物人間」と称される人と、まさか

自分の周囲で関わり合いをもつことにな
るとは、無論、思ってもみなかった。死
後、お浄土へゆく、と信じようとするも
の、今、現在、眼の前で横たわってい

る病人に、どう対処したらよいのか、
“おばさん”は、身をもって看取る者たち
に教えてくれたような気がする。

善導大師の一千三百年御遠忌をお勤め
した、昭和五十五年、浄土宗は「いのち
を考える」というテーマを教化の最前に
掲げた。大正大学の仏教学に籍を置いて
いた私には、「いのちを考える」というテ
ーマのもつ言葉の響きは、とても新鮮な
ものを感じられた。おりしも時代は、我
々の生命に、科学が、今まで考えつか
なかったような事実を、次々に成しえてい
ったからだ。人の誕生に関しては、試験
管ベビー、人工受精、遺伝子交換、人の

病氣や死に関しては、臓器移植による延
命等々が、急激にクローズアップされて
いた。誕生や死というどうにもならない
決定的な自然のいとなみに対して、人為
的な技術が介入する。自然のありようを
人間は科学によって壊そうとする。その
なかで「生かされる命」というような思
想を、表現しにくい現代社会に、宗教
は、どう対応するのだろうか、興味があ
った。おそらく浄土宗や、他宗でも、教
団を動かしている中樞の人々は、それら
について議論が盛んになされ、いづれ教
団としての「現代の生命をめぐる問題に
対する指針」のようなものが、発表され
るであろうことを期待していた。

しかし、期待は、はずれた。

以来、自分の方法で、宗教家として生命の問題に、どう応えるのか、若干、学びながら、脳死・臓器移植等について論文を発表してみもした。

誰れもがいう通り、どんなに格式ばった論文で実証を試みようと、一度きりの我をも忘れる体験には、真実の重みがあった。

昭和六十一年十月九日、現住職夫人である「おぼさん」は、七十代半ばにして、我々から認められる「意識」を失った。

二十年ほど前、五十代で、はじめての高血圧のため入院加療し、その後、数年

で二度めの入院。しかし、以来十数年、体調は大事をとっていたせいも、よく安定を保ち、不自然だった呂律や、手先の不自由さも、快方にのみ向うようだった。

その朝は、前夜以来、久々に「寒い」と感じさせる気候であった。やっと訪れてきた秋の気配に、衣替えでまだなじまない冬服が、やっとしっくりするような気になっていた。

前日、遠隔地へ研修に出かけ、その日の法務のため、研修を早退きして午前十時を回った頃、寺へ帰って来た私は、まず、住職が、いつもの居間で、ヒゲをそっていたことに驚いた。

「あれ、和尚さん、出かけなかったんですか」

「ああ」

静かに頷く住職に、私は呆れた顔で、言い返した。

「なんだ、出かけるって話だったのに」

研修を早退してきたのは、住職が、親戚寺院の披露宴に、信州まで出かけて留守になるはずだったからだ。それなのに、呑気にヒゲを剃っている住職の姿に、せっかく早く帰ってきたのに！という想いが起り、

「どうして、行ってあげなかったのですか！」

信州行の列車は、もう出発している。今から発つても披露宴には間に合はない。自然と語調は強まった。住職は、静

かに言った。

「お婆さんが今朝、倒れたんだ」

奮ぶる気持ちは、その一言で、さっと沈まり、続けて尋ねた。

「それで、どうなんですか」

「今朝、救急車で運ばれてな、どうやら危ないらしい。けれど、心配しないで、おまえは、お経に出かけてくれ」

いつか、このことは、必ずくること、といつも忘れず念じていた。だから、外へ出ても小刻みに電話を入れることが、自分のできる最低限度の日課だと思っていた。

けれど、それが、きょうだと思わなかった。

氣掛かりな思いのまま、時間に追われるごとく、おつとめに出かけた。

救急病院である日本医科大学付属病院は、当寺の参道を出て左へ降りる坂の途中、歩いて五分程度の至近距離だ。しかし、この夕方ほど、病院へ向かう足どりの重い日はなかった。朝から既に何度か足を運んだ、内の者に連れていってもらったのは、増築中の白壁のビルの地下、長椅子の二十もあろうか、オキシドールの匂いが鼻につく待合室だ。「おばさん」は、階上の集中治療室に居て、今は、誰れも面会などできない状態なのだという。

待合室からは、廊下の人の流れも見え

ない、気なぐさみのように片面に、くもりガラスはあるが、その外は、灰色のコンクリートの壁だ。部屋のほぼ中心部の天井近くに、直径三十センチほどの時計がある。部屋の中にいる十数人の人たちは、不思議とうつむくか、その時計を、ただみつめている。

待合室に言葉は、ない。

長椅子に腰かけて、私たちも、やはり時計をみつめた。

今朝、いつもと変わらず、五時すぎに起床した「おばさん」は、六時位から凡そ一時間かけて、境内のお地藏様、観音様、無縁様、歴代上人や開基様、浄心寺

のために尽力下さった総代様等々、縁の深い墓地に、線香をあげ、水をあげ、順番にお参りして歩く。線香だけでも三十本以上になる。これを、雨の日も、寒暑もなく、毎日続ける。そのお参りをすることに對するひたすらさは、まさに「おばさん」の生き様であつた。

七時半ごろ、外のお参りをすますと、お内仏の前で、しばし手を合わす。そして茶の間に入り、牛乳を飲んだり、果物を食べたり。朝の食事が一番おいしいという。いつものように牛乳を冷蔵庫から出し、お膳のまえに坐り、テレビを見始めた。

台所と仕切りのない茶の間は、家事をする従姉と、よい会話の場である。

「おばさん、今朝は少し、寒くなりましたね」

「……………」返事はない。

「おばさん！」振り向くと、「おばさん」は横になっていたという。

「おばさん、具合でも悪いんですか？」そばへ寄って、顔をのぞこうとした従姉は、すぐに、ただごとではないと察知した。軀をかきはじめたからだ。

救急車で運ばれた診断は、「脳梗塞」。三度目の血圧疾患でもあるから、絶望的であるとのことだった。

冷たい長椅子に、背筋は、寒気を感じ、時計をみつめる眼から、涙がでてき

た。

「おばさん」が死んでしまう。もう、会話も通じない。あわただしい朝からの半

日に、静かに「おばさん」を想った途端、はじめて悲しみがこみあげてきた。

「お浄土で会える」ことは解っている。

けれど、もうこの世で会えないのだ。涙

の、頬つたう早さは増した。拳を握りしめて、声をこらえる私の前に、従姉がやってきた。

「おばさんに会わせてもらいましょ」

そういつて私を促した。私たちは階上の集中治療室へ特別入れる許可をえた。

(つづく)

○「浄土」表紙版画絵販売についてのご案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

四

行

詩

清

明

野山の勢い 芽生くさま
草木を映して
小川に水が光る
私も 風のように

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



木

下

隆

一

随

筆

集

37

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(23)—

木の
した
りゅう
隆一

目が覚めた時、部屋の中に虎徹はいなかった。明け方、肩口から潜り込んで来て足許でモソモソしているのを、うるさいと邪慍に足蹴にしたのまでは覚えていたが、入口の襖が二十センチほど開いているところを見ると、恐らく自分で開けて出て行ったのであろう。猫のように臨機応変に爪が出たり引っ込んだりする訳ではないが、犬はあの武骨な手で案

外器用に障子や襖を開けるとこが出来るのである。

襖の隙間から、電話で応対している母の声が聞こえて来た。声のトーンが上がったり下がったりしているのは、かなり情緒不安定な状態を表している。

「えーえー、浪人の資格とって帰って来よりました。照れ隠しか何か知りませんが、ムスッとして、本当に可愛げのないことで……」

自分ではいつもと変わりなく母に接しているつもりだったが、どこか素直でないところがあったのかもしれない。それが母には不満だったのであろう。〈反省材料ではあるなあ〉と思ったが、どこからともなく現れて擦り寄って来た虎徹を抱いて、

「とは言うものの、どうすりゃいいんだ」

と、私は呟いた。その思いの中には、虎徹の移送という問題も含まれていた。

当時、犬の他地域への移送は、進駐軍の命により固く禁じられていた。狂犬病を恐れてとられた措置のようであったが、詳しいことは分からない。「進駐軍の命」は伝家の宝刀で、物事を有利に導くために各方面でかなり安易に乱発されていたから、果たしてそんな禁止令があったかどうか疑わしいが、戦火に焼かれて客車や貨車をやりくり算段して列車を運行していた国鉄にしてみれば、この忙しい時に犬なんぞ運べるかという気持ちがあったとしてもなんら不思議はない。

結局虎徹は私たちと一緒に東京へ移ることは出来ず、下の家の若夫婦が親切に預かるうかと言ってくれたが、ヨチヨチ歩きの子供がいる家庭に預けるのも憚られて、何の方策もないまま、一時蓮見小五郎に預けざるを得なかった。犬の扱いに慣れている小五郎が心よく引き受けてくれたので助かったが、この一時が数週間なのか数か月なのか、これきりになってしまうのか、誰にも予測はつかなかった。

ヘコテちゃん、毎日のように来て、格子戸の前に坐っているのを見ると可哀想で……という葉書が来たところを見ると、小五郎は放し飼いにしていたようである。恐らく裏道伝いに妙正寺の山を越えて通っていたのであろうが、どんな思いで格子戸の前に坐っていたかと思うと、憐れでならなかった。

が、突然ひょんなことから、虎徹移送の道が開けたのであった。父が運輸大臣の秘書官に会った時、虎徹の話をする、「何だ、そんなことですか」と、どこかに電話して移送の話をつけてくれたのである。その時、秘書官は「大臣の犬ということにしておきましようか」と事もなげに言って笑ったそうである。秘書官の好意には大いに感謝したが、同時に本音と建前を使い分ける大人の社会に、私は反撥を覚えて、素直には喜べなかった。そして、自分が社会に出た時には本音で通そうと思ったものだった。現実的には不可能なことを、世間知らずの少年であった私は、真剣に夢見ていたのであった。

虎徹が東京に着いたのは梅雨の最中であつた。再会はほぼ二か月ぶりだつた。

品川駅まで父と受け取りに行く、虎徹はセントバーナード犬でも入れそうな大きな移送箱に入れられて、ホームの隅に置かれていた。貨物の扉が閉められた後は真つ暗闇の中に閉じこめられたまま、殆ど二昼夜がかりの一匹旅の旅路の終わりであつた。さぞかし心細かつたことであらう。箱の奥に体を押しつけるようにして虎徹は坐っていたが、声をかけると、水の入ったアルマイトのボウルを蹴飛ばし、入口の鉄柵に体ごとぶつかつて歓喜の声をあげた。足許にほんの一口齧つたコッペパンが転がっていた。

鎖をつけてやると、虎徹は先に立って歩き出したが、腰を落とし加減にしてどうも歩き方がぎこちない。

「どこか怪我しているのかな」

と、父に言うともなく言つて、後足を調べてみたが、どこも怪我している様子はなかった。ぎこちない歩きながら、虎徹は先を急ぐ。駅の外に出て、街灯の鉄柱を見つけると、虎徹は近寄つて片足を上げた。

「お前、小便がしたかったのか」

すぐ終わるだろうと高をくくつたのが間違ひだつた。衆人環視の中で、虎徹の小便は三分以上も続いた。私にはもっと感じられた。自分がやっている訳ではないのに、気恥ずか

しくて耐えられなかった。殊に若い女の子が嫌ねえと眉をひそめて通るのには参った。

「もういい加減にしろよ」

と言つても、虎徹はやめなかった。いや、とまらなかつたのである。二昼夜も我慢してゐたのだから無理はなかつた。仕方なく、私はそっぽを向いて立っていた。

虎徹が着いて、久し振りに三人と一匹の生活が戻つて来たと思つたのも束の間、朝鮮戦争が激化すると共に化繊業界は特需景気で好況に転じ、父の帰宅は連夜午前様という有様となり、我が家はまた元の母子家庭に逆戻りしてしまつた。もし虎徹がいなかったら、母と私の間はずっとギスギスしたものになつてゐたに違いない。虎徹こそいい面の皮だつたが、いつの間にか、お互いに言いたいことは虎徹を介して相手に伝えるという図式が出来上がつてゐた。

秋が深まり、ようやく私は受験勉強を始める氣になつた。慶応の文学部一本に絞つたといへ、今の受験生に比べればのんびりしたものだった。そんな私に寄り添うように、虎徹は甘えたり拗ねたり、時には全く無視したりしながら、常にそばにいた。悩みを打ち明ける友も馬鹿話をして氣を紛らわす友もない孤独な私の、唯一の伴侶であつたと言つてもいいだろう。

近所の神社の五尺ほどある土塀に猫を追つて飛び上がったたりする、凡そ犬らしからぬ行

動する犬であつたが、昭和二十六年四月、私が大学に通うようになってからは、それまでほど相手をしてやれなくなり、虎徹は心なしか淋しうであつた。しかし、私には私の新しい生活が始まり、一年間のブランクを取り戻すのに汲々としていたから、虎徹の気持ちを忖度する思慮に欠けていたのは否めないが、青年の域を脱して成犬としての落ち着きが出て来たものと考えて、私は氣にも留めなかつた。

その年の十月の初め、虎徹は死んだ。毒殺されたのである。変質者が盗みを目的とした者の仕業であつたか、犯人が拳がらなかつたので不明だが、生け垣越しに投げ込まれた薩摩揚げに仕込まれたストリキニーネを舐めて死んだのである。

夕方、庭で遊んでいた虎徹は茶の間まで来て、異常な痙攣で全身を突っ張らせると、ドサツと倒れた。助けを求めて、必死な思いで茶の間まで来たに違いなかつたが、もう声も出ない状態だつた。助けてくれ！ と訴える目が澄んでいただけに、余計私を動転させた。咄嗟に抱き上げると、一キロばかり離れた犬猫病院に私は走つた。途中、痙攣はますます激しくなり、ともすれば虎徹は腕の中から飛び出しそうになつた。あまり強く抱きしめていたので、診察台下ろす時、院長の手を借りなければならぬほど、私の腕は硬直してしまつていた。

「ストリキニーネだね」

と院長は言った。

「この子の心臓が強いのか、それとも薬の量が少なかったのか……」

そんなことを言いながら、院長は強心剤のような物を注射した。アンブルを切り、注射器に薬液を吸わせる院長の一連の動作が、私の目にはひどく緩慢なものに映った。既に院長は匙を投げていたのであろう。

「薬にしてやりますか」

しばらく間を置いて、院長はポツンと言った。素人目にも、もう保たないのは明らかであった。それなら一時も早く薬にしてやるのが虎徹のためだと判断して、

「お願いします」

と断腸の思いで、私は頭を下げた。

僅か三年に満たぬ短い命を精一杯健気に生きて、虎徹は死んだ。かすかに鼻孔が動いて最後の息を吐くと、それまで荒々しく波打っていた胸も腹も動かなくなった。

その時、俄に窓の外の虫の音が高くなった。虫の音を、私は虎徹の挽歌だと思った。以後、四半世紀、私が犬を飼うことはなかった。伊豆で暮らすようになって、タロと名付けた仔犬を飼うまでは……。

(終わり)

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^く の 生涯 (十六)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

続・浄山時代

清浄華院に登^{のぼ}董^{とう}して、岩井が何よりも喜んだのは、本堂にお祀^{まつ}りしてある阿弥陀仏像の高さと、法主がすわる高座の位置との、バランスの良さだったという。

「高座に上がって手を合わせたら、ごく自然

にご本尊が視線に入ってこられる。じつに拝みやすい。これほど「納まった場所」はちょっとないな」

と、とても満足そうに語っていたとは、梶原重道の追憶である。

「納まった場所」といっても、単に高さだけですむ問題ではない。須弥壇^(せみだん)から高座までの距離も微妙に影響してくる。たいがいの人

なら、あるがままの配置を受け入れて、多少、見上げ気味になつても、そういうものなのだと観念するのが普通なのだが、彼は違つていた。多分、それらのかもすハーモニイを何よりも大切にし、またそれをかき分ける微妙で繊細な感覚を、彼は持つていたのであらう。

五重の勸戒師に招かれても、前夜のリハールで、岩井は高座の高さ一つについてもゆるがせにしなかつた人だつたと、すでに書いてきた。浄山の本堂の絶妙な配置に彼が満足したのは、それとまったく同質と考えていいと思う。

三宅春光は大音寺時代の岩井について、朝の勤行がすんだあとの、岩井独特の回向について、強い印象をいだいていたが、この浄山においても梶原が、

「あれだけはちよつとはかの誰にもできな

つたことではよな」

という注釈つきで、同様に強い印象を持つてゐるのだった。

その印象のなかには、

——とにかく、ものすごく長かつた。

という感慨も、入っている。

それというのも、回向には私的な縁故者がまじつていて——というよりはそれが主体だったから、勤行がすんで皆が下がったあと、法主である岩井に、内侍勤務の伴僧が独りだけついて、行われる。あとの内侍勤務者は作務衣に着替えて、須弥壇の灯明台磨きという仕事がつまっている。

この雑役の発案者は、晋董しんどうしたばかりの岩井法主その人だったそうだが、これがなにする油のからむ仕事だけに、なかなか厄介で、手間と時間を食う雑役だったという。

笠のついた、黒塗りの灯明台だったそうだ

が、油で汚れてニチャニチャしているのだ。油というものは熱のあるうちはさらさらとしてまだいいが、冷めた時ほど扱いにくいものはない。それを布で空拭きしてゆくのだが、灯明台ばかりか、たちまちこっちの手まで、ニチャニチャしてくる。梶原に言わせると、まだ若くはあるし、内侍勤務の雑役のなかで、これほどいやな仕事は他になかったそうだが、これが終わるころ、やっと回向のほうも終わる。それで「ずいぶん長い回向だったなあ」と、今でも思いだすのだそうだ。

ところがその灯明台、毎日毎日、空拭きしているうちに、だんだんピカピカしてきて、なんともいえない、使いこんだものの独特の美しい色になってきたそうで、改めて岩井の「眼」に感心したという。

閑話休題——あるとき梶原が回向の伴僧についていると、次ぎから次ぎへと、縁故者の

「先祖代々」の回向文が独唱されてゆくうち、梶原の師匠の名前がでてきたのには、びっくりしたという。

当時、彼の師匠の桑山実成は病いを得て臥せっていたのだが、その病氣全快の祈願が、始まったのである。

もちろんそれはほんの短い時間ではあったが、彼は思わずはっとしたと、筆者に語ってくれた。

ついでに書いておくと、読者のなかには「生きている人の回向？」と、疑問に思う人もあるかもしれないが、回向文には、

——存者離苦得樂 亡者超生淨土

の言句があるくらいだから、これはいささかも不自然ではない。仏教は世間の人が思っているよりもはるかに、懐の深いものなのである。

梶原は岩井の浄山晋董と同時に、同じ堺組

から法類の弟子として内侍に入った人だから、浄山時代の岩井を描くにはまことに有り難い語り手であるのだが、彼がもう一つ、強い印象をもっている出来事がある。

それを、彼自身の談話で、つづることにしよう。

『“一味会”という修養団体があるでしょう。あそこから出している一〇ページほどの薄っぺらい雑誌があった。それに「原稿を頼まれたので、わしが口述するから、君、筆記して文章にせい」というわけですよ。

話は変わるが、あれだけ説法には慣れたお方だったが、それでも会場に着いて主催者の挨拶がすみ、出てゆく手を後ろに組んでね、座席をこう二、三回歩きながら——今から考えると、あれは予習

だったんですね。高座に上がってお十念もすんで、そして出だしの言葉をね、考えてなさったんじゃないかと、今、わしは思う。

というのが、それと同じなんですよ、口述筆記も。こう頭を振りながら、とにかく歩きながら、しゃべりだすんですね。それをまとめて書きあげて「これでよろしいですか」と見て貰いに行ったら、読んでくれて、「これでよろしいから、郵便に」というわけで、私が封筒に宛名を書いて、三銭の切手を貰いに御前（ごぜん）さんのところへ行った。当時、封書は三銭だった、今の六十二円が。

そうしたら机の引出しから小さな秤（はかり）をだして載せるわけですワ、その封書を見ると天秤（てんびん）のおしりがびんとハネ上がった。三銭切手が二枚いる勘定や。そした

ら「お前、原稿用紙の周りの余白を切つてから封筒に入れなさい」——参ったね、これには。当時は学生やったし、えらいケチンボやなあと思った。何とどしみたれな、と。

ところが後で知ったんですが、寄付に千円、二千元と、気前よう出してなさる。今と違って、大学を出た人の初任給が四十五円か五十円だった時代の千円、二千元ですよ。ちつとやそつとのカネではない。福岡の油山遺跡にある鎮西上人の記念碑、それが出来たのも岩井さんの寄付があつたればこそでしょう。あの時分にそんなこと聞いとつたらなあ、私の考えももつとちごうとつたやろうに。

私は今、この話、あちこちでちよいちよい引用させてもらうんですワ。これが冥加というもんだらうと。

よう考えてみると、うちの師匠もそうやったもんなあ。うちの老僧は毎朝、大浜の潮湯へ行つてましたが、お勤めは帰つてからです。わしゃその間に掃除しかんならんわ、カンテキに火をおこしてお茶沸かさんならんわ……。このお茶沸かしのタイミングがなかなかうるさかった。お勤めの頃あいを見計らつてお湯が沸くようにして、お茶湯を供えんならん。それがすまんと朝の食はなかつたからね。まだ子供やからやつぱり早よ遊びにゆきたいですわな。けれども掃除はなんぼでも早ようできるが、そんなんやからお茶はそうはいかん。師匠が朝風呂から帰るまでに沸かしといたらええやないか、ちゆうようなもんですけど、それをやるとこんどは「炭がもつたいない」言うて怒られる。

増上寺から知恩院へ

それでいて、岩井御前やったら三銭の切手二枚のところを一枚にして金ためて、ここというところでボンと千円でも二千円でも出す。うちの師匠なら、お茶一杯沸かすのにも炭のことをやかましゅう言うて、外へでたら、キレイやったなあ。

超善寺^(註5)さんはきれいやと、皆さんから聞かされました。ということは、出すものは出したということですよ。

岩井御前の話とうちの師匠の話二つを合わせて考えると、あの時分の寺修行というか、一人前のお坊さんになるには、みんなそういう修行をしてきたんですね。物を決してムダにしないということが、ずっと伝わってきた。そこらへんが坊さんの原点じゃないかなと思いますわ。われわれの代になって、そういう修行はなくなってしまうたけれども』(梶原重道

清浄華院に法主であること二年で、この大僧正に、運命の急展開が、訪れてくる。

昭和九年一月二十九日、増上寺七十八世の道重^(註6)信教大僧正が、世寿七十九をもって遷化^{せんげ}したことが、その契機をなした。

道重は真宗本願寺派の大谷尊由^(註7)が、「他に求め難い学徳双備の僧」と評したという近代の名僧である。関東の大震災は彼が増上寺に晋^{しん}董して三ヵ月後に起きた惨事だが、その一周忌に彼は周囲がとめるのも聞かず、飛行機をチャーターして空から散華し、死者の冥福を祈^{いの}つて回向した挿話が有名だが、^{ふしぎしんみょう}「不惜身命」の教化に奔走したことでは、岩井と共通していた。

その道重が遷化したのである。後任選びは今と違ってもちろん選挙だが、有効投票数二千九百二十八票中、二千九百一票を得て、岩井が当選した。

唐突なようだが、岩井と増上寺は、全く縁がないわけではなかった。まだ道重が在世していた昭和八年に、招かれて増上寺の五重相伝に、勧誡師を勤めているのである。

僧侶を対象とした「五重伝法」はしばらく措き、檀信徒など在家を対象とした「化他五重」が、東日本で行われることの少ないのは事実である。記録に残っている岩井の勤めた五重約五百会の中でも、関東以北はわずか二十九会にすぎない。

在家信者にたいする五重は、文明七年（一四七五）に岡崎の大樹寺で大檀越の城主松平親忠に授けたのが最初といわれる。徳川家康の五代前である。が、浄土宗では宗の法度とし

て、在家への五重による血脈相伝を禁じた。その時期は、少なくとも家康より後のことであったろう。というのは、家康はやはり大樹寺で、五重を受けているからである。

とはいっても、民間でもひそかに行われてはいたらしい。それが大っぴらになってきたのは、文化五年（一八〇八）に増上寺五十五世の在禅が在家五重の規準をつくり、京都専念寺の学僧・順阿隆円が著書「浄業信法訣」で同じく在家五重の規範をあきらかにしてからだといわれる。隆円は天保五年（一八三二）の没だから、要するに五重が一般に普及したのは、近世末期なのである。

いらい、近畿を中心に、西日本で盛んとなった。五重は手順が複雑なために、準備がなかなか大変で、遺漏のないようにしようと思えば、かなりのエネルギーを必要とするが、第二次大戦をはさんだ現在でも、住職一代の

うちに最低一度は五重を執行し、檀信徒もその感動を伝えて、生涯に一度は五重を受けるもの、といったしきたりみたいなものが出来つつある。

布教師であり、五重の勸誡師としても高名な寺田定信は浄土宗選集の岩井智海著「五重講説」に寄せた解説のなかで、ある真宗の僧が、

「わが浄土真宗に浄土宗の五重のごときものがあつたなら、この日本を真宗一色にしてみせるのに」

と語つたという挿話を記しているが、それほどのものが、スタートは同じでありながら、東日本で行われることの少ないのは、宗学を担当していた檀林寺院(注)との力関係や、江戸時代らしいのしきたりなどが、大いに影響したからであらう。

岩井の増上寺晋山式は昭和九年四月十一日

に行われた。その晴れの日の午後八時四十分、今度は浄土宗管長（現在の門主）にして知恩院第七十九世・山下現有大僧正の遷化である。岩井はその前日の十日、浄山から知恩院に登嶺して病床にある百三歳の管長を見舞い、暇ごいをしてきたばかりだったから、感慨はまた無量だったにちがいない。一書は、

『もし猊下ぎげのご遷化が一日或は半日早かつたならば、師の晋山式は延期のやむなきに到つたであらう。全く師の増上寺晋山式の終えるのを待たれてご遷化になつた感あるのは誠に猊下と師の因縁浅からざるを憶おもわしめられ有難いきわみであつた』

と記している。

この前後、じつは浄土宗は、騒然としていた。

管長の遷化からわずか六日後の十七日夜、京都黒谷の大本山金戒光明寺が火を出し、大殿（本堂）から大方丈、その他主要建築物の大部分にいたるまでが炎上して烏有に帰していった。

序列から言えば、次ぎなる候補は百万遍・知恩寺の林彦明大僧正だったが、健康上の理由から、知恩寺住職をも辞したい意向らしいという見方が、一宗に流れていた……。

当時、管長は上記の二カ寺に増上寺と清浄華院を加えた四大本山の住職から選ばれることになっていたから、候補は上記のほか岩井と、岩井の後任として名古屋の光明寺から清浄華院に進董した加藤鏡心正僧正の四人ということになる。

しかし出火によって、当時の浄土宗四大本

山の筆頭だった金戒光明寺もろとも、管長候補の最有力者であった同寺の法主・郁芳随圓大僧正は大きく後退してしまった。

そしてもし林が辞任すれば、選ばれたその後任を加えた三人が事実上の候補となる。

噂は真実となつて、林の辞任は六月八日に公表された。

あわただしくその後任の選挙が運ばれた。当選したのは三河の昌光律寺住職・杉山大運正僧正だったが、杉山が辞退して事はまた振り出しに戻る。

再選挙の結果、長崎・大音寺の住職桑田寛随正僧正が当選した。そしてその翌日の八月三十一日には、もう管長候補者の告示であつた。

選挙は九月三十日に行われ、有効投票数三千七百八十七票中三千四百六票を得て、下馬評どおり岩井が管長に選ばれた。増上寺法主

に在任することわずか六カ月と二十日後のことである。

なんだか空恐ろしくなるような榮進ぶりだが、当時の宗報を繰っていて、筆者はつぎのような文章に出会った。

それは東京から京都にいたる鉄道の東海道本線に沿った各教区長にあてたもので、

『管長^{げいか}猥^{わい}下 御晋山式御挙行ノタメ左記
御旅程ニ依リ管内御通過ニ就^つキ宗侶及会
衆ハ最^も寄御通過駅ニ参集ノ上御送迎申上
クルヤウ管下各寺院ニ無洩告知^{むせつこくち}可^い相成此
段及通牒候也』

そして東京駅から京都駅まで、実に六十八にもものぼる送迎可能な駅の通過時刻が掲載されているのだった。それにまたその列車というのが、午前十時十五分に東京駅を発車して、

浜松着が午後五時四十三分、そこで一泊して翌日は午前五時六分から再び車中の人となり、京都駅着は午前十一時十一分なのである。

そして午後一時からの晋山式に臨むのだ。

これを書いている間、筆者は新幹線のことなど忘れて、しばしタイム・トンネルをくぐったような思いに遊んでいたと言っても、賢明な読者は了解して下さることだろう。

それはさておき、時に岩井は、もう七十二歳になっていた。(つづく)

(注1) 須弥壇とは、仏像を安置する台座のこと。もとは須弥山を形どったところからこの名があり、須弥座ともいうが、現在では様式も多様化している。

(注2) 浄土宗の第二祖・鎮西上人(聖光房弁長、一一六二～一二三八)の記念碑のある油山は背振山系の一支峰で、福岡の南郊にあり、標高五九七メートル、遠く玄

界灘も眺望に入る景勝の地である。かつて中腹の西油山には三百六十坊を数える天福寺があり、それが絶えたあと、東油山にも同じく三百六十坊を従える泉福寺があったと伝えられ、建久元年（一一九〇）比叡山留学から帰った鎮西上人がこの油山の学頭として衆徒の教育にあたったという記録があるが、その位置は長いあいだ不明だった。それを憂えた福岡の一行寺住職・裏辻倫道師が、博多の中堅商店主を中心とする八日会の賛同を得て調査に乗り出した。この八日会は本編の主人公・岩井智海僧正が大正四年六月に一行寺で授者を勤めた五重を記念して結成された修養会という因縁があった。調査を委嘱された郷土史家・木下謙太郎氏は七年四月に旧泉福寺の遺跡を発見した。その後、油山顕彰協議会が結成され、建立の本格的な資金募集活動が始まったが、

なかなか思うように集まらなかったところ、岩井僧正の大口寄進で道がついたといわれている。顕彰碑の完成は昭和四年三月で、題字「鎮西上人霊蹟」は当時の浄土門主山下現有^{（びんが）}猊下の筆、裏面の銘文は望月信亨博士の撰。この遺跡地には現在、正覚禪寺の観音堂があり、福岡市民の憩いの場となっている。（この稿の大部分は宗報掲載の裏辻倫道師「宗史蹟・二祖鎮西上人遺蹟地」に拠った）

（注3）大浜の潮湯は戦前の堺名物の一つで、ブルまがいの大きな浴槽が評判だった。「朝風呂会」という、顔を合わせる仲間だけが入れる会があり、大阪市から来る人も多かったという。筆者も少年のころ一度つれられて行ったことがあるが、浮き輪を持った子供も多くいて、風呂ともいえない大変な混雑だったことを覚えている。

(注4) 僧侶のお勤めとは、勤行ごんぎやうのこと。

(注5) 超善寺は梶原重道師の住職する寺院。

この物語のころは桑山実成師が住職だった。寺方てらがたの間では住職を呼ぶのに寺院名をもってすることが多い。

(注6) 道重信教師(一八五六—一九三四)は長門国厚狹郡宇部村(現山口県宇部市)の人。

同村の松月庵で小田信立の得度をうけ、のち同郡の仁保良運のほか山下現有や伊藤無閑、野上運海らに宗学や仏教を、また二十五歳から三十一歳まで京都に留学、帰国して松月庵を継いだ。東京の宗学本校をはじめ宗の各学校や曹洞宗大学などで教鞭をとった。明治三十三年には増上寺内に仏学院を創設、仏教の民主化をはかり、機関紙「凡聖」を発行するなど、宗門学徒の育英と仏教の弘通に心血をそそいだ。大正十二年に増上寺に晋董、翌年に勸学、大僧正に進んだ。

(注7) 大谷尊由師(一八八六—一九三九)は真

宗本願寺派の二十一世宗主光尊の四男に生まれた。大正・昭和にわたる宗教家、政治家で、兄光瑞と共に中国・南洋に渡り教線の拡張に努め、同派執行長、管長事務取扱などを歴任、兄について重きをなした。のち貴族院議員となり第一次近衛内閣の拓務大臣のほか北支開発会社総裁や内閣参議などに。

(注8)

檀林寺院とは僧侶の教育を担当する寺院で談林ともいい、鎌倉時代から存在した講義所だったが、長い期間に伽藍も整備され大寺院となった。関東に最も数が多く、十八の檀林があったが、これは家康の命によるといわれ、慶長か元和頃(約一六〇〇—一六一五)から出来はじめたが、制度として確立したのは貞享二年(一六八五)以降とされる。

(注9)

郁芳随圓師(一八六七—一九四五)は滋賀県大津市生まれ。野州町安楽寺で森

端瑞源に得度をうけ、のち京都西方寺住職郁芳信定の養子となり、東京の宗学本校などに学んだ。自らも宗の学校に数鞭をとり、滋賀県安土の浄敎院住職に。のち仏教専門学校長（現仏教大

学）から大本山金戒光明寺法主に転董、さらに本編の主人公・岩井智海のとをうけて浄土宗管長となり八十一世知恩院の法灯を継いだ。

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒一〇〇一五二 東京都千代田区二ツ橋一―一

TEL (〇三) 二二一〇三三

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六、十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年三月二十五日 印刷

平成二年四月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一、一、一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番



教え・しきたり・行事の解説書〔日常勤行式付〕

仏事と信仰生活・浄土宗

宮林雄彦編

● B 6 版並製
● 百四十二頁
● 定価八百円 (送料二〇〇円)

本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教えⅡ
① 仏教の教え／② 仏教の流れ／③ 浄土宗の教え／④ 念仏信仰の真髄／⑤ 寺参り募参り／第二章 日々の信仰生活Ⅱ① 仏壇／② お仏壇への礼拝のしかた／③ その他、仏壇・仏具、お墓参りの注意／第三章 お経・念仏の実践Ⅱ① 日常のおつとめ／② その他のお経／第四章 仏教行事の知識Ⅱ① 年中行事／② 葬式と年忌供養／③ その他の仏教行事



群書

発行発売 群書

〒170 東京都豊島区巣鴨 4-7-6-403

発売 続群書類完成会

〒170 東京都豊島区北大塚 1-14-6

☎東京(03)917-8411
振替口座 東京7-168759

☎東京(03)915-5627
書店でも注文できます。